「多元的古代」研究会・関東

多元 第9号
1995.10.1

TAGEN

発行人◎高田かつ子　編集人◎青山富士夫　事務局◎〒211 川崎市幸区小倉1-1, I-514 下山昌孝方　TEL 044-522-4185

メガース博士（エバンズ夫人）来日
縄文時代倭人の南米渡航について

十一月二日東京で講演会

来る十月二十六日、アメリカ、ワシントンのスミソニアン博物館の考古学者ベティ・J・メガース博士（エバンズ夫人・74歳）が東方史学会（代表古田武彦氏）などの招きで来日、十一月二日には東京で講演会も行われることになった。

メガース女史は、既に一九六十年代から、夫エバンズ氏（故人）と共に、南米エクアドルのバルディビア遺跡から出土する土器の中に、日本の縄文式土器と複合的な共通点をもつ土器が多数あることに注目し、来日して日本各地の縄文土器も調査した結果、縄文中期における、太平洋を越えた倭人と南米との交流という、画期的な学説を提出された。当時より海外の学界では活発な論議と注目の的となったが、最も関係の深いはずの日本の考古学界では、ごく一部を除いて、きわめて消極的な反応を示したまま、今日に至っている。

古田武彦氏はこれに対して、魏志倭人伝の「又裸国・黒歯国有り、復た其の東南に在り、船行一年にして至る可し」とある記事と呼応する学説であることに注目、エバンズ夫妻らの学説を中心とした論文集「Man across the Sea」を「倭人も太平洋を渡った」として訳出された（一九七七年創生記刊、現在八幡書房で復刊）。さらに、現地バルディビアと、ワシントンのスミソニアン博物館研究室にメガース女史を訪ね（既に夫エバンズ氏は死去）、夫妻の研究の足跡を詳しく追跡された（その実状は古田武彦著「古代史を疑う」一九八五年駸々堂刊、に詳しい）。古田氏はさらに、最近足摺岬付近の古代巨石遺跡を、魏志倭人伝に、女王国から四千里の距離にあると書かれている侏儒国に比定され、同地が、日本列島でもっとも黒潮の流れに近く位置することから、その海人が黒潮に乗って、中南米海岸にまで渡航したのではないか、という仮説に進まれている。

今回来日されるメガース女史は、足摺岬のある土佐清水市の文化団体などによる足摺巨石文化シンポジウム実行委員会の招きで、同地の遺跡も見学され、古田氏らと共に、倭人の太平洋渡航などの課題をめぐるシンポジウムにも臨まれる予定となっているので、そこでどのような見解が示されるか、注目されるところである。

（記・青山富士夫）

関連記事、第二面・十二面

「多元の会」　入会のお誘い

「多元的古代」研究会・関東は「古田武彦氏の提唱された、多元的に歴史を観る考え方に賛同し、それを継承発展させることを理念として、日本の古代の真実の姿を研究」する会です。そのほかに難しいきまりはありません。同好の皆様のご入会を歓迎します。

入会申し込みの方は住所・氏名・フリガナ・電話番号を明記の上、左記へ年会費をお払い込み下さい。

▼入会金千円・年会費四千円
▼郵便振替
口座名／「多元的古代」研究会・関東　口座番号／00170・9・76877
お問い合せは事務局まで

「エバンズ夫人来る」

古田武彦

一

心ときめく秋だ。エバンズ夫人が来る。わたしが手紙でいつも"My American's sister"と添え書きする方、すぐれた考古学者、ベティ・J・メガース博士（夫人の本名）が日本に来られるのである。

もちろん、夫人の来日ははじめてではない。最初は、三十数年前、南米エクアドルのバルディビア遺跡出土土器との「相似」に注目され、夫君の故エバンズ博士と共に日本に来た。そして関東や九州へと縄文土器とその遺跡を求めて、日本列島各地を歴訪されたのであった。

その結果、「日本列島から南米エクアドルへの縄文人伝派」という、当時において前人未到、学問本来の意味で"冒険的"な新学説を世に問うたのである。それが「沿岸部エクアドルの早期形成時代―バルディビアとマチャリラの土器へ人類学へのスミソニアンの貢献、第一巻」の一書だ。スミソニアン博物館の出した学術報告集の冒頭に輝いている。

爾来、三十年。必ずしも、一般世間の対応は芳しくなかった。アメリカ人にとって「コロンブス以前に、すでにアジア人が"渡航"してきていた。」というようなテーマは、信じがたい、と言うより、うけ入れたくない「事実」だった。しかし、真実を理性で獲得しようとする、（スミソニアン博物館がそうであるように）夫妻にたいして深い理解を示す識者も、独創を重んずるアメリカの場合、必ずしも少なかったとは言いがたいのである。

これに反し、日本の学界の多くは"頑冥"だった。論より証拠、現在まですべての教科書において、このエバンズ説を紹介したものはない。日本人の起源に関する、興味深い国際的学説であるにもかかわらず、一言も紹介されていないのだ。「邪馬台国」問題において、近畿説と九州説の双方のあることを報告しているように、エバンズ説に対して賛否両論あることを明記して紹介しても、問題はないはずだ。しかし、一切ない。"教科書を左右する勢力"が協力しているのでは。そのように推量する人があったとしても、これを無下に斥けえぬ。これが現状だ。少なくとも「この学説の存在を知らなかった」わけではない。世界最大のスミソニアン博物館自身が、館の内外にあれほど確然と明示しているのであるから。

二

そのような「日本の学界」の対応をよそに、学問上画期的な一大進展があった。

たとえばブラジルの寄生虫研究の自然科学者たちによる共同報告（一九八八）、また愛知ガンセンターの疫学部長、田島和雄氏のHTLV・I型の遺伝子研究は、いずれも「日本列島の住民と南米の原住民」の両者（各一部）が共通の祖先からの分岐であることを「証明」した（前者では、エバンズ説を引用）。

したがって今回のエバンズ夫人の来日は、まことに"好機"をえたものとなったのである。会員の皆さん方の純粋かつ情熱的な支援と歓迎を、切に伏してお願いしたい。

三

わたしがワシントンを訪れたとき、夫人はスミソニアン博物館の蔵する、南米エクアドルのバルディビア遺跡群出土の土器片、そのおびただしい収蔵物を、この上ない大胆さと好意で、わたしに対して"解放"して下さった。何重もの扉とカギによる、厳重な収蔵ぶりであったが、その必要なカギ類の一切をわたしにあずけ、午前・午後・昼休みと、いつでも出入自在だった。一方の「厳重」さと他方の「信用」とを見事に使い分ける、アングロサクソン社会のルール、そして何より夫人のお人柄に打たれたのであった。

その一夜、夫人はわたしを自宅にまねかれた。大きく、静かなたたずまいのお宅に、一人住んでおられた。

その中の奥まった一室に、わた

しは導かれた。

「ここがクリフォードの書斎です。そのままにしてあります。」

エバンズ博士の部屋だった。紙一つ、ペン一つ、動かさず、当時のままに。

「お子さんはいらっしゃいませんか。」

「二人で研究のために、世界を歩き廻ることができるように、子供は作りませんでした。」

夫人の姿を、正視するにしのびなかった。

わたしにとっても、博士は「至高のペン・フレンド」、学問上の敬すべき盟友であった。真に心の友だったのである。

四

最後に、補言させていただく。二項、いずれも前号『多元第8号』の玉稿についてである。

第一は、中小路論稿（「和田家文書ノート」HISTORIAE 8）。いつもながら清明にして暢達の文だ。だが、一つだけ補足させていただこう。

わたしの研究の出発点は、親鸞だった。その主著、教行信証の後序に有名な一文がある。元号の歴史的表記法によっている。

「承元丁卯歳、仲春上旬之候、主上臣下、法に背き、義に違い、忿を成し怨を結ぶ。」

承元の弾圧の記載だ。建永二年（一二〇七）十月二十五日、「承元」と改元された。改元された以上、年号は「元旦」にさかのぼり、仲春（二月）でも新年号で書く。これが「元号」の意義なのである。

これに対し、明治以後に"新表記式"が採用された。たとえば、大正十五年十二月二十五日、「昭和」と改元されたが、その当日以降のみを昭和元年とする。和田家文書は先の歴史的表記法に従っているのである。この点、すでに中小路さんの快諾と了承をえた。

第二は、上林さん。玉文中、私見についていささかの誤解あり、改めて詳述する。ギリシア語・ドイツ語（シラー）等、上林さんのおかげをこうむること、筆舌に尽くしがたい。厚く感謝させていただくこと、百回。

古田武彦コーナー

◆講演会

10月7日（土）松本市・中日文化センター（松本駅前）午後1時より「縄文のダイナミズム」

11月12日（日）東京古田会　東京都勤労福祉会館（八丁堀）午後1時より

◆新聞・雑誌

古田氏は今春来、産経新聞朝刊隔週火曜日に「古田武彦が読む」のタイトルで書評を連載されているが、その9月12日号分の一部を紹介する。

「おひさまいろのりんご」
堀口清志、久子著（清風堂・850円）

本書は、中学校の教師（文）と元小学校教師（画）夫婦の作。子供の有希ちゃんを主人公とした。阪神大震災の痛ましい体験をもとにしている。しかし、温かく、ほほえましいストーリー展開の佳品だ。

だが、わたしにはこのような作品を「評価」する力はない。ただ、常日頃感じてきた、一個のテーマがある。

それは、日本から海外諸国へ向けての「金銭供与」のことだ。あれは、向こう三年間、「辞退」させていただくのが"筋"ではないか。

「わたしの国では大きな震災に遭遇しました。いたいけない子供や老人、また多くの女性にも青年にも、犠牲が出ました。『義捐金』のスケールをはるかに越えた、国家的な災害でした。

わが国は、ここ三年間、その復興に全力をそそぐ所存です。

ですから、まことに申しわけありませんが、ここ三年間は、従来の『海外援助』を停止させていただきます。悪しからず、御了承下さいますよう、心からお願い申し上げます。

その代わり、と申しては失礼ですが、阪神災害地の完全復興成りました暁は、旧に勝る『海外支援』のため、総力を尽くす所存でございます。」（中略）

……もし一軒の富家があり、その家内に病人があり、地震崩れで家屋を損壊しながら、その「復旧」不十分のまま、他家に"金をくばりつづけた"としたら、表面は感謝されながらも、内心では、その「お大尽づら」が冷笑されるのではあるまいか。それと同じだ。

わたしはかつて神戸に住んだ。青春の地である。今年三月、そして四月、当地を訪れ、復旧の遅々たるに驚いた。そしてこの八月、三たび当地を訪れたが、今なお遅々としている光景に、胸が痛んだ。そして本書に接したのである。……

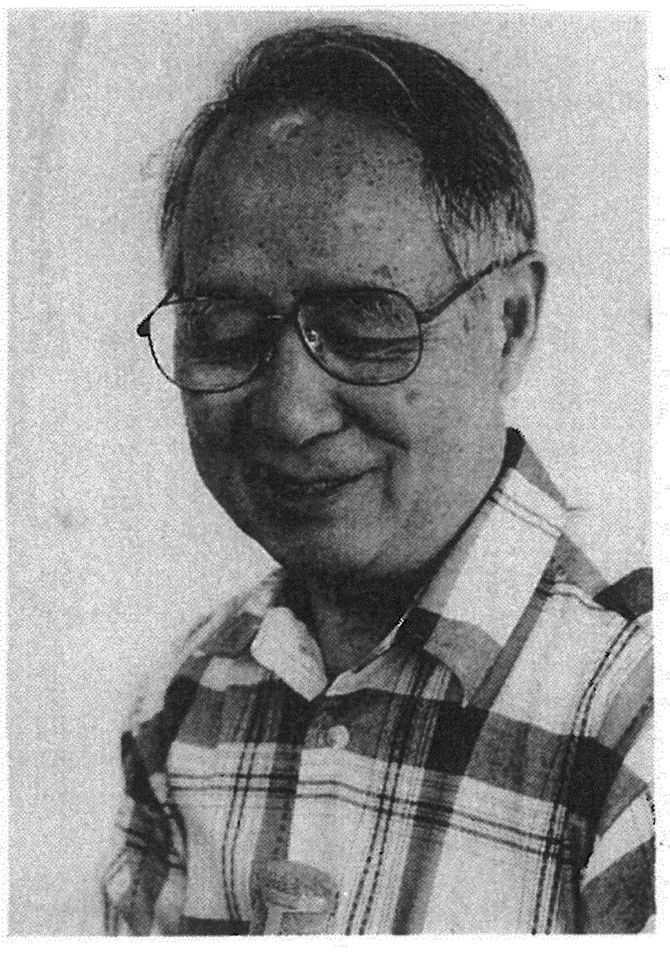
（以下約二五〇字、省略させていただきます。）

山田宗睦

日本書紀講座

第十三回

書紀成立の過程を示唆する第七の一書



講義中の山田宗睦氏

引き続き第五段の十一に及ぶ一書を順番に読み進んでいる。第六の一書は長編であり、古事記と内容がよく似ていることで注目度が高いが、第七の一書は第六の一書やあとの第八の一書との折衷的な内容と指摘される。つまり、カグツチを斬ったら神々が誕生するのだが、雷神の誕生は第六段と、大山祇神の誕生は第八段と似ている。第七の一書の話の中で二つのことが印象に残った。ひとつは東国の神フツヌシであり、もうひとつは訓註のズレが図らずも示唆している書紀成立の構造である。

第六の一書では東国の神とされるタケミカヅチ、フツヌシが一緒に登場するが、ここではフツヌシだけがでてくる。神々の名前は分かりやすいものは新しく、わけのわからないものは古い。ヌシという名は必ずしも古くない。フツヌシとタケミカヅチは藤原氏が関東と大和とのつながりをつけるための存在であった。両者とも水運の神であったと思われるが、藤原氏によって大和と関係づけられた。しかし、いつ、どういうプロセスで、というのは大問題である。一体、関東が大和に服するプロセスそのものも難題である。多元史観ということで、あちこちに王朝があったというだけでは古代史は解けない。フツヌシが香取の神であると書いているのは「古語拾遺」だけである。これは藤原氏のライバルであった斎部氏が自分の家系をアピールするために著した書であり、フツヌシとの関係をうかがわせる。第七の一書がフツヌシだけにふれてタケミカヅチにふれていないのは、それが「古語拾遺」系、香取系の一書であることを物語っているのではないか。

また、第七の一書が倉稲魂、岐神の訓註を付けているが、これは第六の一書に付けるべきもので、ずれている。これは何を意味しているのだろうか。日本書紀成立のカラクリを示唆していると思われる。書紀は倭国史というような倭国の史書から盗作しており、この点で古田さんと同意見だが、盗作の範囲については見解が違う。古田さんは盗作の範囲を段々拡大してきて「続日本紀」にも盗作があるとの見方のようだが、そうは思わない。一書として引用されているものには、倭国で作られたもの、日本国で作られたもの、があり、しかも成立年代も異なるものだと思う。これらの一書を原一書と呼ぶとすると、現在、書紀で見る一書は原一書を書き替えたもので、現一書と呼びたい。なぜそう判断するか。簡単にいえば、神様の名前が統一されているからである。さて、訓註がずれているのは、いろいろな一書を引用する過程で書き忘れが生じ、それをあとで付け加えていることを示すものだ。

第八の一書は五つの山祇、山の神が生まれたことを語る。これまではカグツチを三段に斬ったという話であったが、ここではイザナキは五段に斬る。カグツチの体の部分がそれぞれ山祇と化したという。首は大山祇、むくろは中山祇、手は麓山祇、腰は正勝山祇、足はシギ山祇である。そうですか、というほかはないが、正勝は意味不祥。

第九の一書は黄泉の国訪問異譚ともいうべきもの。注目されるのはモガリがでてくることである。以前、古墳からモガリへという、和田説を紹介した。モガリの盛大さが権力に比例するようになると、古墳は次第に衰えてくるというのである（となると、この異譚は新しいのではないか）。イザナキが黄泉の国から逃げかえる際、八色の雷に追われる。桃の実を投げて雷を退散させる話は、古事記と共通している。八つの雷も古事記と同じである。ただ、腹、陰に雷がいることでは共通でも名前が違い、この一書ではあと背、尻、手、足に雷がいるが、古事記ではあと左

右の手、足に雷がいる。また、雷を防ぐ道の分岐点に立つ道祖神が登場するが、文献としては最も古い部類ではなかろうか。

山田先生は書紀の律儀さ、一種の合理主義をよく指摘される。古事記との比較では特にその感が強く、書紀は古い、古事記は新しい、との分析になるほどと思う。

今回の講義で民俗学的な要素も多くふれられた。この辺にも関心をもっているので、今後の展開を楽しみにしている。(木村由紀雄)

▼第十四回　10月8日（日）午後1時半　文京区民センター（はがき通信で15日とお知らせしましたが、正しくは8日です。）

中小路駿逸氏・講演会（一九九五・八・二〇）―要旨―

新・古代学の景観

万葉・宮室・大古墳――古代史に開けてきた新たな視界

中小路駿逸氏恒例の東京講演会（本会主催）は去る八月二十日午後、文京区役所シビックホールで行われました。引き続き行われた懇親会にも、多数会員の方が参加されましたが、ここにその講演の要旨を紹介します。

日本の古代史はたった一つの通念に支配されてきた。ほかならぬ「天皇の支配」ということである。これに対して古田武彦氏が真向から異論を唱えてきたが、誰も反論しない。通念には根拠がないことを持統天皇自らが認めている。書紀には二人の初代王が登場する。ニニギノミコトと神武天皇である。ハツクニシラスと読んで崇神天皇を初代とする考え方はまちがっている。

持統天皇は自分がこの列島の主であると宣言している。逆にいえば、それまでは九州にある本家の傍流であることを認めていた。ニニギノミコトはアマテラスの孫である。持統はアマテラスの位置に相応すると思う。持統の孫の文武が「宣命」で主権の正当性を宣言した。そして、これを歴史の本筋と誤解させてきたのである。主権の正当性が及ぶのは、イザナキ、イザナミが生んだ大八洲がその支配権の範囲である。支配の名分と実態とは違う点で、書紀、続日本紀など日本の史書と中国の史書の認識は一致している。白村江が一つのポイントである。大宝元年に「建元」と言う言葉が出現する。大和朝廷が初めて天子として元号を定めた。

さて万葉集の研究にも新しい光が当てられてきた。万葉は一貫した編集にはなっていない。なぜ雑歌から始まっているのか。その前に違った分野があったのではないか。アヅマ歌はあるが、日本海側を指すと思われるヒナの地元民の歌は欠けている。また、陸地の盆地農民型の歌は多いが、船乗りの歌がない。海の歌といえば、海から陸を歌う歌、海から島をみる、山をみる、といった歌ばかりである。沖縄の歌とは対照的である。ヒナには船乗り文化、風と潮の歌があったのではないか。アヅマ歌では歴史の歌が欠けている。地元の名もない人の歴史の歌がない。万葉は謎だらけといってよいが、何が欠けているか、という視角から逆に新たな世界が見え始めてきた。

新たな視界が開けてきたのは考古学も同じ。最近、大阪の弥生遺跡から大型建物跡が発見されて話題をよんでいる。邪馬壱国の物証探しでは墓が注目されてきたが、重要なのは宮室である。女王が居住しているのは宮室である。墓は女王のいた場所の近くにあるとはいっていない。墓ではなく、宮室を探せ、である。倭人伝の読み方に大きな見落としがあったのではないか。さらに、古墳の理解についてこれまで大きな思い違いがあったように思う。

古墳は大きさと様式を持っている。この二つは別の要素である。そして、よく誤解されているように大きさは被葬者の格を示さない。前方後円墳という様式の古墳が九州から関東まで分布していることは、その時期、その範囲内で古墳の主たちの中に飛び抜けた権力者がいなかった証拠である。もし、そうした権力者がいれば、当人、その一統だけが、前方後円になるか、その逆かである。格の違う権力者は様式を変える。この点を最初に主張したのは、私である。

では、様式は何を示すのか。それは一概にはいえない。身分や権勢の違い、格を示すためなら、様式の違いで示せばよい。だが、例えば、前方後円と前方後方との違いがどのように格の違いを表しているのか、よく分からない。様式はその違いが部分的な要素の違いなのか、全体的な要素の構造の違いなのかによって、事情が異なるけれども、場合により格を示しうる、と私は考えている。

（9ページ下段に続く）

古田先生と行く『青森遺跡巡りの旅』に参加して

福島県原町市　原　廣通

7月28日から30日に、多元的古代研究会・関東の主催による標題の旅に参加しました。全遺跡についての感想は、紙数的にも大変ですので、自分にとって特に印象と関心の深かった事柄を報告させて頂きます。

径1mの柱跡

今回の旅は50余名の参加で大変に楽しく、盛りだくさんの内容でした。

初日の朝に、青森駅に集合し、バスで待望の『三内丸山遺跡』に行きました。遺跡のある小高い丘の上からは、遠く岩木山やむつ湾を眺めることが出来、野球場を造成中発見された遺跡は、ほぼ円形に広がっていて、気が遠くなる程にビッシリと積層した縄文土器片を、露出した形で見ることが出来ました。その多量さは、この遺跡が五五〇〇年から四〇〇〇年前までの約一五〇〇年もの間、繁栄を続けた証です。新聞報道で話題となった高層建築物の柱は、今もその根元を土中に残し直径約1mという6本の栗の柱が立ち並んだ当時の建物を想像しました。

遺跡の中で驚いたものの一つは、「子供を葬ったミカ棺」が多数出土していたことでした。子供と大人の埋葬位置が区別されており、大人は土坑墓でミカ棺は使用されておらず、谷の東側に整然と二列に並んで出土していました。この列の先頭部（遺跡中心）には何があるのか、興味は尽きませんでした。

プレハブの展示室では、特に先生が「見て下さい」と言われた岩偶の素朴さには、当時の人々の祈りや願いが凝縮されている様でした。これが、石神殿に祭られていた石神かも。

県立郷土館では、古代の出土物を中心に見学しましたが、多数展示されていた縄文土器の区分けと編年をめぐり高田会長はじめ多数の参加者から、放射能での年代測定を何故実施しないのかとの質問が説明員に集中しました。東アジアの国々との文化の交流の流れの矢印を探る上で、絶対年代の測定は古代の出土物研究の前提となるべきで、測定の意義と必要性を私達、古代史に関心を持つ者が、アピールし続けることが大切だと痛感しました。

展示物の中で私が驚かされた物に「ガラスの小玉」がありました。ガラスは現代では、あまりにもありふれた物ですが、実物は数ミリ程の物で、縄文晩期の亀ケ岡出土の物でした。時代を考えると大変な物であると思いました。

この後、亀ケ岡土器出土地を訪ねました。花崗岩で作られた大きな遮光器土偶の記念碑が建つ小さな丘には、現在雷電宮が建っていました。バスで移動して来る間に、JR木造駅の巨大な遮光器土偶の駅舎にビックリ、記念にとみんなでカメラにおさめました。

石塔山での驚き

二日目は、和田氏のご案内を頂き、今回の旅のハイライト「石塔山・荒覇吐神社」へ行きました。急な山道を数台の車でピストン輸送して頂くと、国有林に囲まれた山中にひっそりと厳かに立っていました。社殿の前後に巨岩、巨石があり、この地が古くから信仰の地であったことが伺えます。神社の虹梁には、何と菊の紋章が彫られており、拝殿の入口には狛犬ならぬ獅子（ライオン）の頭部が飾られて、神社としては異例なものでした。

中に入ると本殿には左右に安日彦と長髄彦の頭部の木像、そして中心には五体の大きな遮光器土偶が祭られていました。土偶には、ベンガラが塗られているものが二体ありました。拝殿の四方上部には、国史画帖ならぬ錦絵や歴代の安倍・安東氏の武者絵が並んでいました。また、小型の青銅の古鏡が置かれていて、その背面には漢字伝来以前のものかと思われる古代文字が記されていました。近い将来には、この古代文字が解明されるかもしれません。本殿内で、和田家資料の研究者であり、紹介者である藤本氏から文書との関わりについて直接お話を聞くことが出来ました。

社殿右側には、五輪塔が建ち、安倍、安東、秋田の各氏一族の霊が祭られており、社殿左側には、資料展示室が建っていました。膨大な資料と各地からもたらされ、伝えられた品物がビッシリと積まれ、並べられていました。そして、近い将来公開され研究者により解明されるのを、静かに待っているかのようでした。その貴重な歴史的文物を、私達に快

く見学させて下さった和田家の方々と、神社関係者の皆様に心から感謝したいと思います。

社殿の正面の丘を抜けて、木立ちの中を進むと、林の中の木洩れ日の下に、秋田孝季の墓と伝えられる盛り土が有りました。墓標も無い高さ1m程の盛り土でした。寛政年間の偉大な歴史家に対して、静かに合掌して頭を垂れました。見学を終えた私達は、和田家の方々から冷たい飲物や果物等の御馳走を戴きました。予定の時間を大幅に超過しましたが、充分な満足をもって、石塔山神社を後にしました。

この後の十三湖の中の島の資料館を見学後、「寛政奉剣額」を間近に見ることが出来ました。丁度この時に市浦村に戻って来たところでした。写真では見慣れた額でしたが、実物では、秋田孝季と和田長三郎の文字が薄くなっていましたが、はっきりと読み取ることが出来ました。この後に当額のあった山王坊跡・日吉神社を見学しました。

バスガイドさんから「青森では、人をけなす時に、このツボケ」と言うことを教えてもらいましたが、これも東日流外三郡誌に言う、津保化族の名残りでしょうか。

オセドウ遺跡公園は貝塚が発見された場所ですが、ここに神明宮と呼ばれる小さな神社が有り、この神社は、かって長髄彦神社と呼ばれていたとのことで、驚きました。神明宮の名前の通り、神社は略式ながらも神明造り（伊勢の内宮に倣った）でした。貝塚から発見された縄文人は足が長かったとのことで、長髄彦の伝説と結び付いたのでしょう。オセドウの名前の由来については、県の資料や解説では、お伊勢堂がなまったとしていますが、東日流外三郡誌72巻の詞書の中に「十三於瀬堂神物より書写」との文章が記されていることから、古来からの地名であるかもしれません。

削られた石碑

最終日は東北町にある「つぼの石ぶみ」として知られた「日本中央」碑を見学しました。中世以来、江戸期そして明治の初期に懸命に探索されても発見されず、謎とされて来た石碑で、昭和24年に川村氏等により、碑文が下側になって埋もれた形で偶然発見されて、一躍脚光を浴びた物です。間近に石碑を注視すると、日本中央の四文字の他に、表面や裏面に明らかな削除の跡が見られました。多くの文字が記されていた可能性が高く、いつ誰によって碑文が削り取られたのか、謎は残されています。

先生のお話では、元々石碑が建てられていた場所から運ばれて来て、文字を削って消した後で川岸から落とされたものではないか、と言うことでした。石碑の大きさや重量を考えれば権力を握った者が、多数の人間を使って碑を葬ろうとしたものと考えられます。数奇な運命をたどって来た碑は、従来の一元史観では全く解明不能です。かわって先生が主張される多元史観により、歴史の激流の中を生き抜いた当碑は、残された四文字で雄弁にその意味を主張しており、解明を静かに待っているのだと感じました。

合掌する土偶

八戸市博物館では、古代の出土品を中心に見学しました。入館直後、館員の説明を受けた後で先生から館員へ、時の朝廷から当地に派遣された正装した武人、源某に対して当地の現地の人々が裸形、放髪の鬼の形で平伏している人形の展示物が入口近くにありましたが、この展示品は古代の当地の人々に対する侮辱であり、間違いであること、当館に見学に来る子供達に正しい歴史が伝えられないことなど、普段柔和な先生が、毅然とした態度で指摘されました。亀ケ岡文化を育て継承した当地に対して、多元史観の立場を実証される先生のお気持ちの強さを見た思いでした。（註）

ここでのハイライトは、合掌する土偶でした。立て膝の姿勢で祈る女性の土偶で、髪の毛を上部で一つに結い上げており、顔には入墨をしていたのか口の回りに模様がありましたが、ひたすら何を祈っていたのでしょうか。

解散の八戸駅前までのバスの中で、日本海を取り巻く広い視点で青森の古代遺跡を見ることや、粛慎との関連等について、先生からのお話がありました。思い出深い、大変有意義な旅でした。幹事の皆さん御苦労様でした。そして先生ありがとうございました。

（編集室註　八戸博物館の人形展示物は調査したところ、源為朝が八丈島で現地の鬼を退治する劇画タッチの場面でした。これに対して古田氏は、八丈島にこのような半獣的現地人など居た証拠はないことを注意されたので、筆者が「当地」の人とされたのは誤解のようですが、理解の大筋は誤りないと思われますのでそのままにいたしました。）

たろんサロン

菅江真澄と和田家文書

東京都　須賀　孝

今年の一月、私のもとに「秋田さきがけ新報」に記載された記事のコピーが届いた。平成六年十二月七～九日の三日間連載で「和田家文書とは何か」偽書の立場を取る、秋田市在住の田口昌樹氏の論文である。

田口氏は菅江真澄について長年研究されており、現在菅江真澄研究会の理事をつとめる傍ら真澄に関する著書も幾冊か出版されている。私は面識はないが氏の名前は存じ上げており、愛読者の一人である。

菅江真澄（一七五四～一八二九）については故柳田国男が「民俗学の先覚者」として世に知らしめたといわれている。その生い立ちについては謎が多く、まだ明らかにされていない部分が多い。しかし彼の遺した紀行日記や随筆集、図絵集は近年の研究者によって徐々に解明されつつある。

さて「秋田さきがけ新報」の田口氏の記事では《菅江真澄との関係でいうと、和田家文書では寛政年間作成の文書に菅井真澄と署名している。真澄が菅江真澄と名乗ったのは文化八年（一八一一）からである。＊寛政年間に署名するとすれば、当時のペンネームである白井秀雄か、本名である白井英二と署名するはずである。しかも自分の名を菅井真澄と誤記しているのである。また「秋田之住人薬師匠真澄」と署名している例もある》と、和田家文書に「菅井真澄」と署名されていることを疑問視されている。

（＊注　氏の著書『菅江真澄読本』では文化七年（一八一〇）の日記『氷魚の村君』から菅江真澄と名乗ったとしている。）

●

私はこの文章を読んだとき、「アレッ」と思った。私も真澄の東北紀行に非常に興味があり、自らの東北探索の参考にしているところも多い。今年の二月と四月、再々度、青森から秋田へ訪れた。目的は真澄の紀行記『そとが濱風』を追うことである。

『そとが濱風』は天明五年（一七八五）乙巳八月三日、秋田領の岩館から大間越街道を北へ進み、津軽領赤石組の岩崎・深浦に入り同年八月二十五日、再度秋田領の十二所の関を越えて、沢尻という村までの紀行である。詳しい内容については『菅江真澄全集』（未来社）第七巻を参照されたい。

四月、大館市立中央図書館（旧栗盛記念図書館）を訪れ『そとが濱風（楚堵賀濱風）』の原本を閲覧しようとした。原本は平成三年に国の重要文化財に指定され、見ることができなかったが、コピー写本の閲覧が許されている。各ページ12行で綴られた見覚えのある紀行記、上部（頭注）の文字は、真澄が再度津軽に来た時、その時の知識をもって記入したと見られる粗雑な文字も見える。そして最終ページに…「あった」確かに、平がなで、「ますみ」と記されている。このことは一体何を意味するのであろうか。

●

田口氏は真澄が「菅江真澄」と名乗ったのは文化八年（一八一一）以後といい、寛政年間には白井秀雄または白井英二と署名するはずだと述べておられる。しかし天明五年（一七八五）書かれた『そとが濱風』には既に「ますみ」と記されている。この矛盾はどう理解すればよいであろうか。『そとが濱風』が文化八年以後に書かれたとすべきであろうか、あるいは「ますみ」という署名が後日の加筆されたものとするのであろうか。

柳田国男はその著書『菅江真澄』（昭和37年3月発行、創元社）で、《菅江真澄、彼が此名に改めたのは寛政享和の交、即ち三河を出てから二十年も後のことで津軽藩の公式記録等には、まだ本名（白井英二秀雄）が伝わっているのである。仮名の菅江真澄の方が今日のように有名になったのは、全くその遺著の全部が秋田人の手に由って保管せられ、しかも何人かが是れを総括して、真澄遊覧記と呼び始めた結果である》と。

真澄はその半生を送った東北地方では主として「菅江真澄」の名を以て知られており、和田家文書再筆作成時に何某ますみ（例えば菅井真澄）と署名されていたとしても、何ら不思議はないのではなかろうか。

推察するに、おそらく田口氏は次のようなことから、文化七年～八年説を取られたと思う。秋田五城目（ごじょうめ）の地蔵堂の扁額（文

化六年六月作）に真澄自ら「三河國白井真澄」と署名し、さらに同じ頃の日記に「真隅」「真栖」とも書いてある。また文化七年の『雄鹿乃春風』序に三河國乙見なる「菅江の麻須美」とあることから文化七年説を取り、一方曲亭馬琴の『著作堂雑記』に真澄が松島で詠んだという歌の一首〈ながめすてて歸らんもをし中々に、霧たち隠せ松島のうら〉が記載されており、それには三河白井真澄と出ている。

●

是は天明七年（一七八七）名月の頃、真澄が松島付近を旅した証にもなっているのであるが（『月の松島』…未発見）ただこの『雑記』が出来たのは文化八年の頃と思われている。そこで田口氏は文化八年以後であるという説をも取られたのであろう。

さらに真澄は『はしわの若葉』で天明七年四月、平泉毛越寺の衆徒に、父母の郷、吉田の植田義方への文通を託している。植田家では古文書を丹念に保存しており、貴重な資料が多数発見されている。その中に紙に包んだ「薄の穂が一本」また「鳥の羽が一枚」発見された。いずれも真澄より植田義方に贈られて来たものである。いずれも義方の筆で「天明七年十一月七日、陸奥真野萱原の尾花、白井英二生より送り来る」「天明八年十一月一日至、白井英二贈之、松前の鶴の思い羽」と書かれてあるという。つまり、この事実によって田口氏は、真澄は天明～寛政年間には白井秀雄／英二と署名するはずであると述べられたのであろう。

しかしこの事によっては、真澄がいつまで白井秀雄／英二と名乗っていたか、いつから菅江真澄と名乗ったか、断定するには多少問題点がある。

まず真澄は天明三年（一七八三）三月、故郷三河を旅立ってから、文政十二年（一八二九）七月十九日、秋田県仙北郡角館で病没するまで、二度と故郷三河へ帰る事はなかったという。なぜ帰らなかったのか、戻れない事情があったのか、推察の域を出ないのであるが、それ以上に、なぜ改名までする必要があったのか、謎とされている所である。

察するに、真澄が天明三年三河を発った時、既に改名を決意し、二度と故郷へ戻るつもりがなかったのではないか。だが望郷の念に耐えず、とはいえ父母に文通することもできず、父母の住む郷、吉田の植田義方のもとへ、その後二十年あまりの間近況を報告して、間接的に父母の耳に入ることを期待していたのではなかろうか。そこで義方はそれらの包み紙に真澄の本名のみを記したのであろう。この場合、三河の人義方としては、後に改められた名より、必然的に本名を記したのであろう。また、津軽藩の公の記録には、白井真隅と名乗った後でも、本名・白井英二／秀雄と記している。これもまた、当然の扱いといわねばなるまい。

このように、二つ以上の名前を持つ人物の、名前使用の時代を特定することは、本人の特別の申告がない限り、その判断は非常に難しいものであると思う。

何の専門知識も持たず、探索した結果を記したので、大きな見落しや誤りを犯しているかも知れず、また反論もあろうかと思います。それも承知の上で記したことを一言付け加えます。

追記・寛政四年真澄の紀行『牧の冬枯』について、特に四年五月から十月に至る情報を知る方、また津軽藩に没収されたと伝えられる『浪岡物語』について何等かの伝承、資料を知る方、下記にご連絡ください。

〒132 東京都江戸川区東瑞江2-40-2
TEL 03(3670)4897

（本稿は、前文に筆者が東北地方の歴史に関心を持ち、遍歴を繰り返すうちに、ついに津軽地方、石塔山、和田家文書に接するに至るまでの経緯が、詳しく述べられています。が、今回はスペースの都合でご了解を得て菅江真澄に関する部分だけに絞らせていただきました。編集室）

（5ページより続く）

前方後円という様式が、一つの格を表示するのであれば、大和の大王がこの様式を地方豪族に対して許可したという言い方もありうる。しかし、「古事記」（雄略記）には、天皇の住居の様式をまねた県主が槍玉にあがった話がある。住居でさえこうなのに、墳墓という永久的な営造物については、特定の様式が許可された云々、といったことがあり得るか。許可といった想定は、大和の王権の卓越という特定のことがらをまず決め、それを前提として、すべての事実をそれに合うように意味づけるための苦心ないし錯乱の産物ではないだろうか。

（木村　由紀雄・記）

定例活動の報告

発表と懇談の会

九月三日の発表と懇談の会の話題提供は、青山富士夫氏の「人麿の運命」撮影記。と言っても写真の話はあまりなく、撮影中に考えた人麿随想。その一つは古今集序文に紀貫之が言う「おおきみつのくらい、柿本人麿」について。おおきみつのくらいとは、大宝律令の正三位を指すとされるが、万葉集でも続日本紀でも人麿が正三位であった徴候は全くないことから、これは後世の人の書き込みであろうなどとして処理されてきた。梅原猛氏だけは真実と解し、正三位の人麿が万葉集では何故「死す」と書かれているか（律令制では三位以上は薨と書く）。それは罪を得て位を召し上げられたからだ、と人麿刑死説に進まれた。しかし青山氏は、古田武彦氏の「人麿が活躍したのは律令制以前の時代ですよ。」との言葉をヒントとして、再検討する。日本書紀天武十四年に位階制更改の記事があり、そこには「階ごとに大き広きあり」とある。

正大壱　正大弐　正大参
広壱　広弐　広参…以下

大宝令で、正三位、従三位をおおきみつのくらい、ひろきみつのくらいと呼ぶのは、訓としては不自然であるが、天武十四年の制度の呼び方が踏襲されたものである。とすれば人麿はその活躍の最盛期に、この元祖おおきみつのくらい、即ち正大参の位を授けられたと考えたらどうだろうか。この位階制度は大宝律令と入れ替わりに消滅するが、貫之は人麿が生前に得た最高の位で呼んだのである。そう考えれば何の奇もないが、従来の碩学がそこに目を向けられなかったのは、七世紀と八世紀の間の大きな政治的変動を考慮に入れなかった故ではなかろうか。

次は人麿の辞世「鴨山に岩根しまける吾をかも　知らにと妹が待ちつつあらむ」の岩根しまけるの意味。民俗宗教学五来重氏らの研究によると、古代、古墳にも入れないような普通人の葬礼は、山中の岩座などに屍を納める風習が一般的であった。大和の三輪山などその代表的な例である。岩根し枕けるは、そのイメージを踏まえた用語で、歌の中の人麿は既に死体となって鴨山に横たわっている。そう読んでこそ、後の依羅娘子の哀悼歌ともぴったりと呼応するのである…。以上詳しく紹介できないが、いずれ本誌に原稿として寄稿されることを期待する。

続いて、阿久津恒也氏の、津軽地方に残るアイヌ語地名の話。それによると同地方は、十三湖を始め、アイヌ語系の地名が夥しい。宝暦年間に津軽藩で作られた「津軽一統誌」を見ると、藩の政策として、同地方に住むアイヌ人たちを、強制的に倭人名に変えさせ、大がかりの「同化」政策を行っている。悪名高い創氏改名の先蹤がここに見られるのである…。この阿久津氏の発表も、いずれ詳しく本誌に原稿として寄せられることを期待したい。

万葉集と漢文を読む会

「東路の手児の呼坂越えていなば吾は恋むな後は逢ぬとも」

この歌、相聞の一首だが、前出の雑歌として採られていた次の歌

「東路の手児の呼坂越えかねて山にか寝むも宿りは無しに」

と共に集中二例の「あづまぢ」の歌だ。「あづまぢ」とは、あづまへの路とも、あづまの国を通る道とも、あるいは東国・東海道の意、ともされている。解釈にゆれがある。

この二首の歌は「安都麻道」「安豆麻治」と表記に異動がある。この点に注目して、市川文雄さんは「安都麻道」と書かれる「道」は道路の意ではなかろうという。現在北海道というが如く、地域を指す用字なのではないかと。東山道、東海道と同じように用いられていたのではあるまいかと提言された。この点、東国の歴史、就中あづまの解釈にとって重要な指摘と思われる。残念ながら当日は、手児の呼坂を越えて行くのは吾と同一人物か否か等の話に時間をとられ、また万葉集の訓点、訓読史の勉強に時間を取られ、あづまの問題はこれ以上の進展はなかった。（この問題は後段に報告）

『梁書』は扶桑国の前半。斉の永元元年（499）扶桑国の沙門慧深が荊州に来ての報告、扶桑国とは、扶桑の木が多いのでそう呼ぶ。

扶桑の木とは、葉は銅（桐）に似ている。初め生えた時は笋＝筍（竹の子）のようであり、それを食用にするという。また実は梨の如くして赤いという。今日わたしたちに思い浮かばない樹木だ。またその皮から布をつくり、衣にし綿にもするという。また紙にもなるという。

さらには法があり、また兵甲、つまり軍隊が無く、攻撃しないという。まるで憲法九条に規定された国

を見るようだ。後半の仏法の流通記事と相俟って、平和な文字のある（紙の使用）文明国を思わせる国柄ではないか。ただ里程から見る国の位置では、文身国、大漢国との関係から明らかには見えてこない。

（富永長三）

安都麻道と我姫之道

富永　長三

八月二十七日の東歌を読む会で、市川文雄さんが、「安都麻道」とは道路の意ではなく、一定の地域を指す用語なのではないかと提言された。以下はわたしの安都麻道考である。「延喜・民部式」はその冒頭に国郡一覧表を掲げる。畿内を中心として、東海道・東山道から南海道、西海道まで、全国を一畿七道に別ける。

この「道」は、たしかに道路の意ではない。また言うまでもなく、この畿内七道の制は八世紀以後のものである。（畿内が大宝元年以前に近畿地方に存在しなかったことは、古田武彦氏が『日本書紀を批判する』Ⅱの六『「郡制畿内」の創設をめぐって』で明らかにされている。）

それでは「安都麻道」とは何時の時代のものなのであろうか。東海道の別称なのであろうか。しかしそのような徴証も知られない。そうではなく、八世紀日本国制立以前の制による呼称なのではなかろうか。

『常陸国風土記』の総記は「我姫之道、分れて八国と為す」と記す。「道」が分れて八つの国になったという。当然この「道」は道路の意ではない。また「古は、相模の国、足柄の岳坂より東の諸県は、我姫の国と惣称した」とも記す。「我姫国」も「我姫之道」も「あづま」と今日読まれている。「安都麻道」も「我姫之道」と無関係ではあるまい。

ある時代「あづまの道」あるいは「あづまぢ」と呼ばれる地域があり、ある時、それが分割されたのだ。その時代を「難波長柄豊崎大宮臨軒天皇之世」と記す。この天皇は孝徳天皇であり、大化の改新によって国郡制の出来た時がこれであると、岩波体系本頭注はいう。しかし、畿内郡制の創設は大宝元年であることは先の古田氏の著書によっても明らかである。「我姫之道」の呼称は八世紀以前のもの。したがって「安都麻道」もまた同じと見て大過ないであろう。

さてそうすると、八世紀以前と見られる呼称を使用する二首の歌もまた、そのような時間帯に歌われた可能性を持つことになろう。さらにこの二首を含む「東歌」の時間帯も同様に解することが可能ではあるまいか。

さらに瑣事にわたるが、手児の呼坂についても、手児という呼称に係わって、真間の手児奈、あるいは埴科の石井の手児等との関係も再考されて良いのではなかろうか。（東歌の時間帯については、別に機会を頂いて詳述することとしたい。）

関東史跡散歩のお誘い

群馬県立歴史博物館と綿貫観音山古墳など、上毛の古墳群を訪ねます。

▼10月15日（日）

▼集合　8時30分　JR上野駅6番ホーム前部（8時39分発・高崎行快速に乗る）。遅れた方は特急あさま号または新幹線でおいでください。

▼第二集合場所　10時15分　JR高崎駅改札口

▼解散　17時頃　高崎駅

お弁当持参、歩きやすい服装で。お問い合せは事務局または富永長三 TEL 03(3308)1971まで。

▼発表と懇談の会へのお誘い

この会は毎回ユニークな発表が続いて、多数の参加者を集めています。十月の白名一雄氏の「天孫族はどこから来たか」、十一月の鴨下武之氏の「東日流外三郡誌と会津古文書の共通点」も、テーマを見ただけで興味津々になってきますが、十二月はいよいよ前漢帝国の創立者高祖・劉邦のご子孫の登場です。

会員の網島氏の友人である高橋孝男氏は、九州出身で現在は東京にお住まいですが、古い系図をお持ちで、劉邦の子孫だという伝承を伝えています。十二月の会では「わが祖劉邦」という題でお話をしていただくことになりました。お楽しみにお待ち下さい。

発表と懇談の会は、会員の皆様の発表の場です。日頃の調査や研究の成果を発表する場として、是非ご活用下さい。希望者は事務局までご連絡下さい。毎月第一日曜日午後を原則としています。

ネットワーク情報

エバンズ夫人講演会

古田武彦氏の唯一の翻訳書「倭人も太平洋を渡った」でおなじみの、エバンズ夫人の講演会が次のように行われます。主催は東方史学会。（入場無料）得難い機会ですので、是非ご参会下さい。

▼11月2日（木）午後1時より
▼憲政記念館（千代田区永田町一の一 地下鉄有楽町線永田町又は桜田門）
▼講演（1）エバンズ夫人（約一時間半）
（2）古田武彦氏（約一時間）

聴講ご希望の方は、葉書に「エバンズ夫人講演会　聴講希望」として、氏名・住所・電話番号を明記の上、東方史学会事務局（〒336浦和市南浦和3・19・2・303高田方）宛にお申し込み下さい。

なお、当講演会は入場無料で実施されますが、実際には相当の経費を必要とします。我々も応分の寄付をして、この事業を後援したいと考えておりますので、志ある方は1口500円として何口でも結構ですから、ご寄付下さるよう宜しくお願い申し上げます。寄付金は、郵便振替により「東方史学会」宛（振替番号 00160・6・148486）へ。

石塔山神社例大祭

青森県五所川原市飯詰の石塔山神社において、九月十八日（前夜祭）十九日（本祭）の両日、例大祭が行われました。七尺の千手観音の開眼、古田武彦氏の講演等があり、全国各地から多数の参列者を得て、盛大なお祭りとなりました。当会からも井上肇、神山功、木村桂造、下山昌孝の各氏が参列しました。

◎催物案内◎

東京都美術館　TEL03(3272)3251
「世界遺産条約登録記念・法隆寺金堂壁画展」壁画の点検・補修のため取り外された壁画12面を展覧、あわせて火災前の模写壁画8面、昭和10年・便利堂撮影の原寸大写真も。11月6日まで。

埼玉県立博物館　TEL048(645)8171
「古代の文字」常設展コーナー特集　古代の木簡、土器、金石の資料から当時の文字使用状況を探る。10月26日まで。

東京都立埋蔵文化財調査センター
TEL0423(73)5296
講演会「縄文時代の植物食」安孫子昭二氏　10月14日（土）1時半～4時

多元の会 カレンダー

会場は全て**文京区民センター**です。

10月

1日(日) 午後1時
発表と懇談の会　話題提供白名一雄氏「天孫族はどこから来たか」

8日(日) 午後1時30分
山田宗睦「日本書紀講座」

15日(日)
関東史跡散歩の会　群馬県立歴史博物館と綿貫観音山古墳など上毛の古墳群を訪ねる

22日(日) 午後1時
万葉集と漢文を読む会　万葉集は巻第十四「東歌」相聞歌を読み、漢文は「随書」東夷伝に入ります。

11月

5日(日) 午後1時
発表と懇談の会　話題提供鴨下武之氏「東日流外三郡誌と会津古文書に見られる共通点について」下山昌孝氏より「石塔山神社大祭参加報告」

12日(日) 午後1時30分
山田宗睦「日本書紀講座」

26日(日) 午後1時
万葉集と漢文を読む会

12月

3日(日) 午後1時
発表と懇談の会　ゲスト高橋孝男氏「わが祖　劉邦」

●当会へのご連絡は、会長／高田かつ子 TEL048(881)9111　事務局／下山昌孝 TEL044(522)4185まで

◎投稿歓迎
会員の皆様の投稿をお待ちしています。
〒151渋谷区本町1・7・16・1102
「多元」編集室　青山富士夫
TEL03(3377)7869

FROM 編集室

ある聡明な友人の言葉。「白村江はやはり大和政権の戦いだったと思いますね。だって亡命百済人の受け入れなどの戦後処理を、専ら大和側がやっているのですから。」◆根拠のありそうな意見である。こちらも確かな反論を得ないままに何カ月が過ぎた。とある日新聞に「百済王族千三百年ぶり里帰り？」の記事を見た。白村江の戦の後、宮崎県の南郷村に亡命したと伝えられる百済王家の子孫たちが、二五〇人も百済の古都扶余市に、先祖の神宝を奉じて里帰り訪問をした、というのである。先方でも百済王朝の末裔に当たる人々がにぎやかに歓迎の式典を行ったという。◆南郷村は百済滅亡の時渡来した王族が住みつき、現代に至るまで先祖の祭を絶やさないことで有名であるという。◆この王族亡命のことは日本書紀に、語られているか。否。日本書紀は自分の勢力範囲のことしか語らなかった。事実は、九州にもその他の地方にも、亡命者は渡来した。だが日本書紀という記録には残されなかったから、後の人は、亡命の受け入れは大和政権によってのみ行われたように錯覚してしまうのではないか。◆史料はしばしば権力にとって都合のよいものしか残らない。書かれざる記録を読む。それは難しいことではあるが、残された記録以上に、歴史の真実を語ることがある。（匙）